

# リレーでつなぐ子ども診療譚

## “新生児屋”と呼ばれた頃

太田市 石川 和 夫

昭和48(1973)年1月より、当時新生児医療を積極的に行っていた東横病院(現在の聖マリアンナ医大附属病院)へ勤務。しかし、その東横病院でさえ今のような新生児用機器はほとんど無く、訓練された医師と看護師が小さな命を守っていたに過ぎなかった。レスピレーターは大学より借りていたボーンズレスピレーター(Volume limitの新生児用レスピレーター)が1台、小児科にマーク8が3台、小児にはJサーキットを接続して使っていたが、新生児に使用するには、死腔が大きいため手作り(水谷部長が設計)の改造Jサーキットによる呼吸管理を行っていた。その他、輸液ポンプが数台有った程度である。当然、ボーンズレスピレーターやマーク8の分解掃除・消毒は、自分たちで行った。一方、ガス分析は、ILメーターが病院に1台あったのみで、キャリブレ(夜間は、自分達で行う)には1時間以上もかかる代物であった。その上、新生児病棟は五階、検査室は一階、酸素濃度のコントロールが出来

ないと夜中に何往復もしなければいけなかった。夜間は看護体制の関係で人手(看護師)不足となる。今と違い呼吸心拍モニターが無いため、重症新生児が入院すると主治医は、クベース脇に机を置き呼吸・脈拍等の記録をしながら状態の観察をするのが常であった。何日か重症の子に付き合っただけで寝不足が続き意識が朦朧としている深夜、“し～ん”と静まり返った薄暗い灯りの部屋でクベース内の子どもをじっと見ていると、その表情や動きが何かを訴えているように見えて来る。時には、“苦しい、もっと酸素を増やせ”とか“喉が渴いた、水をくれ”と言っているように聴こえる事さえあった。調べてみると“血中酸素濃度が落ちていたり、尿量が減っていたり”など、何か“お告げ”を聴いているような不思議な世界に遭遇したこともある。新生児医療は、まだまだ試行錯誤の時代であり、無呼吸発作の子に母親の呼吸数のリズムで揺ると消失するというデータが出ると、温枕にマーク8を接続してそのリズムで

揺すってみたり、新生児生理的黄疸に蛍光灯が効くと言う論文を見つけると蛍光灯スタンドを2台も3台も集めて来てクベースの上から照らしたり、今よりずっと輝いていた時期でもあった。

ある日、白幡先生（産業医大）や堀内先生（聖マリアンナ医大）達とともに入院患者で駆け回っていたとき、丁度、勤務が終わり、帰宅しようと女医さんが通りかかった。看護師さんが窓越しに「あら、先生もう帰るの？」と声をかけると、その女医さん「あの人達、好きでやっているんだから、良いの！」と一言。「好きでか〜」といやに納得したことを覚えている。「きつい」とか「つらい」とか考える余裕すらなかったと言うのが実状だった。

その頃、九州の聖マリア病院（橋本先生）より研修医の平均睡眠時間約3時間と発表され、「それよりはまだ寝ているわ！」と、冷静に受け止めていた自分が不思議なくらいだった。

修行(?)の時期が過ぎ、NICU開設のため昭和53(1978)年1月に総合太田病院へ赴任。赴任当日、「双子の1人が亡くなり、もう1人が呼吸困難で酸素を使っています。」と出生体重1,500gぐらいの子について相談された。「酸素濃度に気をつけて、head boxで様子みても大丈夫そうだね。」と言うと、主治医の答えは「酸素濃度計が有りません。head boxも有りません。」だった。NICU開設のための器具は、まだ何も届い

ていなかった。その時あった新生児用の機器は、CPAP装置とクベース2台のみであった。赴任初日の仕事は、自転車でホームセンターに行き400円(?)の金魚鉢を買い、環境(工務)課でhead box用に加工(写真)してもらおう事と、CPAP装置を分解して酸素濃度計を取り出し注射器とチューブを使いhead box内の酸素濃度を測り、主治医に指示を出す事であった。

翌日、朝早く病棟へ行ってみると、その子の身体には、離皮架にサランラップを張ったフードが架けられ、手足はアルミ箔で覆われ、肩の部分にはhead boxからの酸素が流出しないようにサランラップで防御してあった。冬の寒い夜、室温が下がり体温が下がったため、看護師がいろいろ考えてやってくれたとのこと。感謝すると共に、“このチームとならNICUは、成功する”と確信した瞬間でもあった。

新生児医療を振り返ってみると、“生死は運命である”から“助ける努力”へ。さらに、“障害なく助ける”を経て、現在では“家族の絆”を視野に入れた医療へと変貌してきた。また、医師ひとり一人の力量を問われた時代から、チームとしての実力を問われる時代へと変っている。一方、同級生の定年話が多くなってきた元新生児屋は、新生児医療の急速な進歩を横目で見ながら、最近の“親子関係”や“育児”を心配しつつ着地点を見つけて軟着陸を試みようとする目論みでおり

ます。

年を取ると昔話が多くなります。皆さんにとっては、退屈な話しだったと思

ますが、個人的には、昔のことを思い出す機会を与えて下さった柳川先生に感謝致します。

